平成２１年　第４回定例会一般質問

○議長　横尾　武志君

１番、益田議員の一般質問を許します。益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

おはようございます。１番、益田美恵子、一般質問をさせていただきます。

初めに、ヒブワクチン接種についてお尋ねいたします。ヒブワクチン（アクトヒブ）について日本赤十字社医療センターの園部友良氏は、今までにない特殊なワクチン（たんぱく結合型ワクチン）で、そのおかげで２歳以下の子どもにも免疫をつけることができ、これをうけると抵抗力、抗体ができるだけでなく、のどなどにヒブ菌がつかなくなり、人にうつさなくなると言われています。また、数あるワクチンで防げる病気の中で、病気が重くて死亡や後遺症例が多いのが細菌性髄膜炎、昔の名前で脳膜炎と言ってたそうです。子どもの二大原因菌はヒブ菌が約６００から８００例と言われており、肺炎球菌約２００例とも言われています。普通は死亡する確率が５％、脳の後遺症が約２５％、そのほか軽く済んだように見えても、将来の学力低下が一部に見られることもわかっているとも言われております。発症年齢は生後３カ月から５歳までが多いもので、１歳未満に限られるわけではありませんとも述べられております。そこでお尋ねいたします。１、細菌性髄膜炎の予防接種は１回に８，０００円から１万円と高額な費用がかかると言われており、芦屋町の乳幼児を守るために費用の一部を公費助成できないかお尋ねいたします。２、予防接種の問い合わせまたは接種の希望が今日まであったのかどうかもお尋ねいたします。

大きな２点目といたしまして、ハート・プラス啓発マークについて。１、内部障がい者（身体障がい者のうち体の内部に障がいがある人のことを言います。）その人が身体障がい者用の専用スペースに車をとめたり電車やバスなどの公共交通機関の優先席に安心して座れるような体制づくりのために、マークの導入を提案したいのですが、ご見解をお尋ねいたします。

大きな３点目といたしまして、朝の１０分間読書運動等についてお尋ねいたします。

秋の読書週間（１０月２７日から１１月９日）は終わりましたが、朝の１０分間読書運動、読み聞かせ運動、ブックスタートの３つの事業の成果についてお尋ねいたします。

次に、近年の傾向としてどのようなジャンルの本が読書されているのかをお尋ねいたします。

以上で１回目の質問を終わります。

○議長　横尾　武志君

執行部の答弁を求めます。住民課長。

○住民課長　入江　明徳君

まず、ヒブワクチンの接種についてですが、ヒブはインフルエンザｂ型という細菌です。脳や

脊髄をおおっている髄膜に細菌が感染して炎症を起こすのが細菌性髄膜炎です。その原因となる菌の５０％以上がこの菌です。議員言われましたとおりゼロ歳から１歳の子どもに多く発症しております。２００８年にヒブワクチンの接種が認められるようになりましたが、定期接種でなく任意接種ですので有料となります。接種は大体４回必要であり、４回接種すると通常は大体３万円前後の費用がかかります。この一部を公費助成できないかということですが、今現在、公費助成している市町村は県内にはありません。まず、先進市町村の実施状況や国が予防接種法を改正し定期接種対象疾患に位置づけるかどうか、またワクチンの流通量、ワクチンの絶対量が足りませんので、それの情報を今後収集していきたいと思っております。

それから、要旨２の予防接種の問い合わせについてですが、ヒブワクチンの予防接種の問い合わせは年間１０件程度あります。接種の希望があればかかりつけの小児科に相談するよう役場としては指導しております。

以上です。

○議長　横尾　武志君

福祉課長。

○福祉課長　嵐　　保徳君

それでは、２点目のハート・プラスマークについてお答えいたしたいと思っております。

ハート・プラスマークというのは内部疾患（心臓、呼吸機能、腎臓、膀胱直腸、小腸、免疫機能）に障がいを持つ方をあらわすマークとしてつくられたものということでございます。これは、現実的には障がい者でも内部障がいや内部疾患は外観からわかりにくいということがございまして、一般社会で障がい者として十分に認識されてない、しにくいというのが現状でございます。そこで、身体内部に障がいを持つ方を視覚的にあらわすマークとしてハート・プラスマークというものが生まれ、これはＮＰＯ法人のハート・プラスの会が中心となってこういった方に理解を求めるための普及活動を展開しておられるところでございます。

確かに障がい者の４分の１、これはもう全国的なデータでございますが、この内部疾患の方がある現状では、誤解を受けやすいこうした内面的な障がいを持つ方の支援という点で、このようにわかりやすい視覚的な対策は必要であるというふうに担当としては考えております。

議員ご提案のこのマークの導入につきましては福祉課だけでは、いろんな施設だとかそういったもろもろのことがございますので、先進地の事例等を検証いたしまして、関係各課と今後検討を進めてまいりたいというふうに考えております。

以上でございます。

○議長　横尾　武志君

学校教育課長。

○学校教育課長　鶴原　光芳君

３点目、朝の読書運動等についてということで、朝の１０分間読書運動それから読み聞かせ運動は小中学校での取り組み活動として回答をさせていただきます。

読書活動は、子どもが言葉を学び感性を磨き、表現力を高め創造力を豊かにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものです。このため、小中学校では朝の授業前や昼休みの１０分間を活用して読書運動に取り組んでいます。また、その読書時間に読書ボランティアの方々が各学校へ週に１回から２回読み聞かせに来ていただいております。

その成果でございますけれども、まず１点目には、現場の先生方の評価といたしまして、児童生徒が読書に集中することにより気持ちが落ちつき、読書後スムーズに授業に入っていけるということです。２つ目には、この運動を始めてから本に親しむ児童生徒がふえてきたことで、学校図書館の利用者が増加したということです。また、今年５月に調査しました子ども読書活動推進計画のアンケート調査の中でも、なぜ本を読むことが好きになりましたかという質問に対しまして、どの学年でも、学校の読書の時間で読むようになったからという回答が上位になっていることからも、大きな動機づけになっているのではないかというふうに考えております。

それから、要旨２点目のどのようなジャンルの本が読まれていますかというお尋ねでございますけれども、申し訳ないんですけれども、学校では詳しい分析調査というものはできておりませんので、学校図書館での子どもの傾向は把握できておりませんが、学校の先生方で学校１００選として、子どもたちに読んでもらいたい本を意図的に用意をいたしております。その内容は、文学作品を主としまして、ほかに学習漫画や科学図鑑等でございます。これ以外では、町の図書館で春・秋の２回、子どもたちからお薦めの本を募集し、最近の子どもたちの読書傾向や嗜好を調べています。その結果からでは、映画化やテレビ放映された原作本、それから恐い話、なぞなぞの話、電車や昆虫等の図鑑、漫画の伝記や歴史ものなどが好まれているようでございます。

以上です。

○議長　横尾　武志君

生涯学習課長。

○生涯学習課長　本田　幸代君

次に、ブックスタートにつきましては生涯学習課が担当でございますので、私の方から説明させていただきます。

ブックスタートは平成１４年度に始まりました。毎月乳幼児の４カ月健診のときに図書司書が出向いて本の読み聞かせを行っています。これは、本を通して子どもと保護者が一緒に楽しい時間を過ごすことの大切さや、家庭での読み聞かせの重要性を伝えるためです。この際、絵本を２冊対象者に贈っております。２０年度は１４４名の子どもさんに本をプレゼントいたしました。

成果といたしましては、まず、絵本を２冊もらってうれしかったと大変喜ばれます。また、読み聞かせのきっかけとなり、同時に読み手の楽しい時間を過ごせることに気がついたという感想が多いようです。さらに、子育て中のお母さんと赤ちゃんの図書館利用者が増え、子育て支援としてもその効果を発揮しております。

以上です。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

ヒブワクチンの問題におきましては、まずこの１点から先に入らせていただきます。

確かに先ほど言われましたようにまだ開始されたばかりということで、国の認可がおりておりませんので、これを導入するというのは大変厳しいものがありますが、私も、昨年ぐらいからこのヒブワクチンの問題が党としても取り扱うようになりまして、既に各自治体においてはこのヒブワクチンの質問をやっているところも党といたしましてはたくさんあります。今回私もこの勉強する中で、大変恐い病気だなと思ったのは、風邪のような兆候で、これが細菌性髄膜炎というそういったものに発展していくなんてことはまずだれも予測できないという、そういったものの観点からやはりこれは、当然これは国がしていかなくてはいけない問題でございますので、ここでの結論は求めるのは難しいかもわかりませんけれども、やはり自治体においてまたお母様方にこの接種、ヒブワクチン接種というものがあるんだと、そういったものの意識改革というんですか、お母様方がそういった意識を持っていただく、こんなに恐い病気があるんだと。まして後での後遺症が残るわけですから、これに対してのやはり、宣伝じゃありませんけれども啓発もやっていかなくてはいけないんじゃないかなと、このように考えて今回質問をさせていただくようにいたしました。

それで、日本赤十字社医療センターの園部友良さんという方がこの運動を、ヒブワクチンから子どもたちを守ろうという運動を展開しておられまして、国にも当然要望をいたされております。先ほど課長もおっしゃっておりましたように、ヒブワクチンの内容については述べておられましたが、ヒブワクチンの効果といたしましては、アメリカあたりではもうとにかく減少していると、１００カ国以上はこのワクチンが認められて接種をやっていると言われています。だから日本においてはやっと認められたというだけで、まだ国会でこれを皆さんに接種をしていこうというところまでは至っておりませんので、これはまた国会で議論をしていただくということになるわけでございます。

ただそうはいったものの、いつまでも見過ごすことはできません。自治体は、財政の問題がありますから、国が方針決定いたしましたらそれに従ってやりますというご答弁があります。ただ

子どもたちのことを考えれば、そんなに悠長なことも言っておれないかなという気がいたします。それで、まずは生後３カ月ぐらいから接種をやったほうがいいという、本当に小さい子どもではありますけれども、三種混合と一緒に２回目は一緒に混合接種も、三種混合と一緒に同時接種もできるという、副作用はさほど見られない、今度のタミフルみたいなそういった危険性は余り感じられないと。合計４回というわけですが、これが生後７カ月ぐらいからになると合計３回、１歳過ぎたら１回でいいという形になっておりますが、要するに４回やるということは、３カ月から早い時期にやったほうがこの後遺障がいを残さずに子どもをすくすくと育てることができるという、このようなワクチンでございます。

実際、こちらはやっておりませんけれども、九州ではあまり聞いておりませんが、東京それから山形県天童市は、独自で接種をやっているようでございます。２，５００円を補助したりとか、個人負担が４，０００円で済んだとか、そういったところも現在出ておりますので、当然、これは無料化というのが国の方針としては、この方が望んでおられるのは、やっぱり小児医療という観点から無料化を叫んでおられます。今インフルエンザと言えば一部を負担というのが原則でございますが、こういった、もし病気になったとしたら本当に後のお金の問題が大きいんだと、医療費にかかる直接医療費、それからお母さんであればお父さんでもどちらでも休まなくてはならないというそういった問題点、交通費の問題、後遺症の問題、治療施設の問題等がありますので、これを接種することによって費用対効果は大きいんだと、このように言われておりました。

まずは、先ほど問い合わせが１０件ぐらいあったというお話でございましたが、その対応としてはどのようなご回答をなさっているのか。それから町立病院もございますので、薬が用意されてるのかどうか、この点ちょっとお尋ねいたします。

〇議長　横尾　武志君

住民課長。

〇住民課長　入江　明徳君

１０件ありまして、かかりつけのお医者様の小児科で接種をお願いしております。ただ、このワクチンは絶対量が足りません。その日に行ってその日に接種できるような状況じゃありませんので、まずそういう意思を表明していただきまして、その後、病院のほうから何月何日に接種しますので来てくださいということです。中央病院についても、同じようにワクチンがありません。前もって予約して接種するような形です。ただ、中央病院に聞きますと、今まで接種した人はおらないということを報告受けております。

以上です。

〇議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

それでは、そのワクチンが当然足りないわけですから、足りないことに対してどのような対応がなされているのか。どこにこのワクチンの申し込みというのか、どのような対応でされているのか。実際にこのワクチンを打たれたときの金額とか、まちまちだそうで、まだ金額的にはっきりしてるわけではありません。７，０００円から８，０００円というところもあれば、合計で３万円ぐらいはかかりますというアバウトな数字でございますので、今回その問い合わせの中でワクチンが中央病院においてもないということでございますので、その場合に、例えば希望者があればどこにどのように希望をされるのかお尋ねいたします。

○議長　横尾　武志君

住民課長。

○住民課長　入江　明徳君

このヒブワクチンは残念ながら現在は法に基づく定期予防接種になっておりませんので、小児科医が業者に直接注文して持ってきてもらうという体制です。料金は議員言われるとおり、季節型インフルエンザもそうなんですが、各病院によって４，０００円だったり２，５００円だったり、芦屋の町内でもしております。一定の金額というのは決まっておらなくて、小児科医のほうで金額は決められるような情報を聞いております。

以上です。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

それで、感染経路は咽頭などからの菌がせきやくしゃみなどによって飛び散ることで起こるんだそうです。だから、集団保育にやっておられるお子様ですね、そういった方、集団保育での感染が多いのも特徴ですと、このように言われております。それから免疫力の力が強くなると６歳以上になると重症、感染症は極めてまれになりますということですから、まれであるということで、全くないということではありませんので、今回はヒブワクチン予防接種についての国への意見書も今回は出させていただいておりますので、ぜひ皆様のご理解をいただいて、国のほうでこの制度が一日も早くできることを願っております。もし財政が許せるなら芦屋町におきましても、このヒブワクチンへの接種の費用の一部を負担できればなと思っておりますが、町長、いかがでございましょうか。

○議長　横尾　武志君

町長。

○町長　波多野茂丸君

私も勉強不足で申し訳ないんですが、このヒブワクチンというこの名前、益田議員の一般質問出て初めて知ったわけでございますが、先ほど来より課長がいろいろご説明しておりますように、まだ国がこれを予防接種法をまだ改正してないということで、今からこれは国のほうが政権もかわりまして取り組んでいくのかなと思うわけでございますが、今の時点で町がこのヒブワクチンの接種につきまして費用を補助するということはちょっとまだ早いんではないかなと、判断する、そういうことを判断するまだ情報収集ができておりません。きょう初めて益田議員の詳細なるご質問で理解したという程度でございますので、ちょっとお時間をかしていただきたいなと思うわけであります。

以上でございます。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

それでは、この件につきましてはお母様方への啓発活動も必要かと思っておりますので、担当課におかれましては、ぜひ前向きにそういった周知徹底のほうも、お知らせの中でこういった病気もあるんだということをお母様方に徹底していただければありがたいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

次に、ハート・プラス啓発マークについてでございますが、先ほど課長がおっしゃいましたように、これは内部障がい者でありますので全然わかりません。うちの息子も大腸を全部とってるんですが、全然表面的にはわかりません。かといって身体障がい者という手帳も交付は受けられませんのでわからないんです。酸素ボンベとか抱えていらっしゃる方においては見える範囲でわかるんですけれども、わからない方が全国的にも１０７万人ぐらいいらっしゃるということで、やはりとても、駐車の問題とかいろんなことで、自分たちはちょっと嫌な思いをする場合があるんだというふうなお話を聞いたことがあります。ハート・プラスというのはハートをプラスしようというような形で、こういった形がハート・プラスマークでございましてこれを、車いすの方は車いすの形をした駐車場に絵がかかれております。それと一緒にあわせてこのハート・プラスマークをかいていただければ、そこに安心して内部障がい者の方がとめることができるんだという、これはＮＰＯ法人の方たちが、責任者の方もやはり障がいを抱えておられながらその啓発活動を、いろんなところでこのマークをお届けされてるようです。

それで、何どうなるんだということになりますと、これは、その人にとってのものすごい安心感というのが得ることができるんだと。本当にこの小さなハート・プラスマークでございますけれども、そのことによってご本人たちは安心を得ることができる。だから前回マタニティマークも私質問させていただいたことがあるんですが、やはり妊産婦の方でもまだ妊娠何カ月、数カ月

というのはわかりません。かといって一番大事なときでありますけれども、バスに乗った場合に目に見えませんから座ったときに、若いですからね、白い目で見られるという、そういったハンディがあるわけです。だからそのマークをマタニティマークを持っていれば安心して乗れる。またハート・プラスマークでも身につけておれば、障がい者用のバスとか公共施設を利用するときに安心してそこに腰をおろすことができるという利点がありますので、これはもう、各自治体でそんなにお金のかかる問題ではないだろうと思っております。各施設の問題がありますが、先ほど課長が言われたように、そういったところの検討をやっていただいて、そういったマークを設置できればありがたいなと、このように思います。いろいろ耳マークとか、視覚障がい者の方には耳マークがやっぱり住民課のところ受付のところに置いてあったり、そうすると、ああ、あそこに行けば対応していただけるんだなという、いろんなマークが現在目に見えるような、障がい者にとって目に見えることが一番安心感を与えるという、聞けばいいものですけれども聞けない方もいらっしゃる、あ、あそこに行けば、耳マークがあるから自分は障がいを持ってるからあそこだなというのが、これが優しいまちづくりの障がい者に対する優しい本当の心のあるまちづくりになるんではないかなと、このように思います。水巻に行ったらもう既にこのハート・プラスマークですか、課長何かごらんになったんですかね、いかがでございましたでしょうか。ちょっとご答弁いただいて、見てこられた感じで、よろしくお願いします。

○議長　横尾　武志君

福祉課長。

○福祉課長　嵐　　保徳君

このハート・プラスマークでございますが、今ハート・プラスの会というＮＰＯ法人がいろんな形で啓発されておりますが、公的機関が認めたものではないというようなことでございまして、そうはいいながらも水巻町でもやっておりますし、他の町でも取り組んでおられるところもございます。水巻の場合は、車いすのマークとあわせてこのハート・プラスマークそれとマタニティマーク、それともう一つ、けがをされた方のものもつくられたようでございます。このハート・プラスマークにつきましては、水巻で３カ所つけておりますが、高齢者福祉センターといきいきホールについては駐車場と壁にマークがついておりました。ただ、後から建ちました図書館については、先ほど言いましたＮＰＯ法人がパソコンでダウンロードして、ぜひ使ってくださいということで、それをダウンロードしまして加工して使っているというような状況でございました。

確かにそういうマークがあれば該当者が安心されるということがございますし、一方では啓発活動なり、その方が該当者である事の証として、体につけていただくことも検討していかないとなかなか誤解が解けないと思っています。先ほど答弁申し上げましたように、少し時間をかしていただいて、水巻町の状況なりを十分に検証して検討していきたいと考えております。

以上でございます。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

よろしくお願いいたします。これが印籠の役割をしてるなということをおっしゃってました。この紋所が目に入らぬかというあの印籠でしょうけど。そういった言葉でご紹介をされてありましたので、今後ご検討をよろしくお願いいたします。

それでは、朝の１０分間読書運動等についてでございますが、先ほど、いい成果があらわれているというご返事を伺いまして、本当によかったなと。やっぱり小さいときから、今学力の低下が叫ばれておりますけれども、本を読むことによって読解力それから創造力とかあらゆる面がプラスして、後にこれは出てくる問題でございますので、そのために、公明党といたしましては、２０００年の１月から子ども読書運動プロジェクトチームを結成して池坊保子さん、衆議院議員の池坊さんを座長として今日まで子どもの読書環境整備ということで尽力をしていただいております。もと文部科学副大臣かなにか務められて、それですごく力を入れていただいて、０５年には文字・活字文化振興法とか法的な整備もできているようでございます。やはり小さいときから、――私もちょっと失敗してる、子育てにおいては自分の子育ては大変難しかったんですが、すごく今ボランティアの方もおいでいただいてやっていただいてるということでありがたいなという、読み聞かせは私も勉強させていただいたんですが、やっぱりなかなか難しいんですね、読んで聞かせるということは。自分の子どもならいいんですけども、どの程度わかるかなという問題点もありますし、大変難しいんですが、その中でも、今回図書館もリニューアルされますし、今先ほどの内容面に聞きましたら、文学の本とか余りお答えの中にもなかったような気がいたします。今度の図書館においてはリニューアルには歴史とそれから文学のほうもそろえたいという前回聞いたときにお答えがあったような気がするんですが、内容的にはどんなだったですかね、今度図書館がリニューアルされて新しい本とかが入れかえがあると思いますけど。この前、１回聞いていたんですが、もう一度すみません。何か文学書もそろえていきたいというようなお話しだったような気がしてますので、すみません。

○議長　横尾　武志君

生涯学習課長。

○生涯学習課長　本田　幸代君

選書を現在やっているところでございます。一つ一つ個々に細かい、文学が何％とかそういうのはございませんが、全体の図書の割合の中で、今までの図書館では子どもに対する本が２０％から、２０％と少しでした。これを計画的にですけど２０％後半まで持っていきたいと、そのよ

うに考えております。

○議長　横尾　武志君

　益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

　それから、先日来から下の庁舎のロビーで、私もゆっくり時間があったらすべて見たかったんですが、お薦めの本とか感想文とか、先ほどもお答えがあっておりましたが、相当の人数の人たちが提出されておりましたが、あれは春と秋と両方で、今回は庁舎の下でということで、普通は図書館の中でああいった催しをされてるのか。そのときに私が、今、どのような本が読まれているのかなと思って、見たときに、何か聞きなれない言葉がいっぱいあったもんですから、ほお、変わった本を読んでるんだなとか、そういった感じを受けたものですから、それでどんなジャンルの本が読まれているかなと。それは何でもいいわけですから、それは文学いい本に限定されればー番いいことでしょうけども、やっぱり幅広く読むことも大事でありますし、すばらしい展示がされておりましてすべて見れなかったのが申し訳なかったなと。ちょっと見ただけですので、どういった経緯の中で展示されていたのか、すばらしいことでありますのでお尋ねいたします。

○議長　横尾　武志君

　生涯学習課長。

○生涯学習課長　本田　幸代君

　図書館まつりというのは、春と秋の年２回行っております。春につきましては幼稚園、保育園は参加されませんけど、秋については幼稚園、保育園、小学生、中学生となっております。幼稚園、保育園児については読んだ本のお話の絵ということで毎回絵をかいてもらって、今年も約１６０点近いものが出ておりました。小中学生はお薦めの本というテーマで、先ほど議員さんのお話にもございましたけど、特に感銘した本やお友だちに薦めたい本についての感想文または絵を募集しております。今年で３００から４００点近い作品が出たようです。あと、図書館まつりといたしましては、ボランティアによる特別おはなし会とか、除籍された本の一部を自由にお持ち帰りくださいということで、ブックリサイクルも行っております。

　以上です。

○議長　横尾　武志君

　益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

　私もすばらしいなと思ったのが、せっかく１０分間読書運動があってるわけですので、そのような結果ではありませんが、やはり読んだ感想とかそういったものが展示されるということは、ご本人にとっても力を入れて読むんじゃないんでしょうか。やっぱり次に感想文を書きましょう

とか、お薦めの本の意味を書きましょうといえば、やはり力を入れて習得していく、それが本人の身についていくというものではないかなと思っております。

それから、予算でございますが、予算は地方交付税措置の中に一緒に入ってまいりますので、大変懸念されているのが、他に転用しているケースが多いと言われております。例えば冊数はそろっていたとしても、これはそろっているから充実されているのではなくて、古かったり汚れていたりとか、そういったものでやっぱりリニューアルしていくことも大事でありましょうし、今年度は図書費用が来ているけれどもほかの分野に使っていこうとか、そういったケースが自治体においては見られるということでございますので、この辺のいただいている予算の確保、ちゃんと部局のほうからですね、地方交付税をばっちりいただいて、しっかり確保していただきたいなと、このように思いますが、いかがでございましょう。

○議長　横尾　武志君

学校教育課長。

○学校教育課長　鶴原　光芳君

ここ数年は変わってないと思いますが、小学校で年間の学校図書館の経費として約４０万、１校ずつですね。それから中学校では６０万ほどの予算確保をいたしております。これが今言われる交付税の割合でその額に達しているかどうかというのは申し訳ありませんが、よく調べておりませんが、言われるように蔵書数につきましては山鹿小学校を除き国が定めます蔵書の数、これは全部クリアをいたしております。山鹿小学校につきましてはここ数年、花美坂等で児童がふえたということで、今若干基準値までは行ってないというところがありますけども、現在、この山鹿小学校では、特に児童書を中心に蔵書をふやしているという状況でございます。財政的に非常に厳しい中ではありますけども、この予算確保をしながら、今言われるように古い書籍というのも当然出てきますので、その辺の入れかえを計画的にやっていきたいというふうに考えております。

以上です。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

よろしくお願いいたします。やはり、これだけ充実してきておりますので、学校図書のほうに力をもう少し入れていただいて、入れかえですね、新しい本のリニューアルをよろしくお願いいたしたいと思います。この１０分間運動によって報告といたしましては、不登校や保健室登校が減ったという例もあるんだそうです。それから、いじめが少なくなったという報告も受けておりますというお話があっておりました。それから、読み聞かせ運動に対しましても、当初は何の意

味があるかというお話が、冷ややかな反応であったようでございますが、ボランティアの方々の積極的な応援によって、やっと今学校と地域とのきずながができて、今ではすっかり定着した運動になっているというご報告もいただいておりますので、ぜひ推し進めていただきたいと思います。

それから最後でございますが、ブックスタートはもう定着いたしております。次の段階としてセカンドブックの導入を実施いたしているところもありますので、その点についてのご見解はいかがでしょうか。お尋ねします。

〇議長　横尾　武志君

教育長。

〇教育長　中島　幸男君

ブックスタートは先ほど課長が申しましたように生後４カ月で渡すという、親子が本当に初めての本に出会うという期間です。セカンドブックというのはこの近辺でどこが行っているかよく私は承知しておりません。しかし、子どもたちにどうやって本を読ませるかという一つの手だてとしてはいい方法なんだろうなというふうに思っております。芦屋町ではこういう取り組みはまだやっておりませんけども、学校では、今課長も申しましたように、子ども１００選、学校が推薦する１００選も意識的にやっておりまして、どのくらい読んだというような各個人の統計は学校でとっているようにあります。セカンドブックという行政的に二度目の本をどう渡すかというこの話はまだ芦屋町としては検討しておりません。

ただ、芦屋の子どもは芦屋で育てようと、さわやかな若者を育てようという取り組みを今やっておりまして、だんだん町を挙げてそういう意識になっていただいたと大変ありがたく思っております。今の子どもたち、芦屋の子どもたちも含めまして、規範意識が非常に低下してるとか、それから自尊感情が低下してるとよく言われます。それから学ぶ意欲も低下していると。福岡県県民フォーラムが小倉でありましたときに、町長も登壇していただいたわけでございますけども、その中でも町長がおっしゃっていただきましたが、このようなことは、芦屋の子どもも似たような状況にあると。それを解決する方法として何があるかということを私たち今思ってまして、今検討中なわけでございますけども、１０歳になった子どもたちに、名前はまだ決まってないんですが、２分の１成人式みたいな、これをやろうと今考えております。１０歳の子どもたちを集めて、４年生なんです。これは、５年生、６年生になってまいりますと中学校に進むという自覚がかなり出てまいりますけども、４年生は３年生のギャングエイジから４年になったところで、まだまだそういう認識がありませんから、このあたりで成人式、２分の１成人式、実際の成人式という形で芦屋の意識をしっかり植えて、そしてそういう自尊感情なり目的意識を持って育っていくという、そういう子どもを育てたいなと、生き方指導も含めてやっていきたいなと思っておりまして、間もなく具体化しようと、先日も教育委員会等で検討いたしました。その際に、いろい

ろな意見が出た中で、何か記念品が出せないかという話も出てまいりまして、これ予算が伴うことですからそりゃまあいろいろ難しいねという話はいたしましたが、今議員のおっしゃいますセカンドブックという制度も、これは予算が伴いますから何とも言えませんけども、それも一つの視野に入れて今後検討させていただきたいと思います。そして２分の１成人式というのがきちっと日の目が出ましたときにまたご相談申し上げたり、皆様からご理解いただいて、芦屋の子どもは芦屋で育てようということを全町挙げてやっていただく、その一助にできればというふうに思っているところでございます。

以上です。

○議長　横尾　武志君

益田議員。

○議員　１番　益田美恵子君

大変、教育委員会におかれましてはいろんな取り組みを子どもたちのために、未来の子どものために尽力をしていただいていることに本当に感謝するところでございます。

最後でございますが、池坊さんに対して、幼いときから本に親しむことは大切ですねというご質問に対して、今、話題になっている少年犯罪の陰には創造力と予測力の欠如によって、自分の行為の先にはどんな結果が待っているかわからずに犯罪を起こしてしまうケースがあるのではないでしょうか。また世界的には満足に食べることもできず自由に発言することもできない国があるなどということを本によって知ることができます。本に親しむことで創造力を養い、いろんな経験を積み、知識を得ることができるのです。さらに、いじめや困難に陥ったときに、本によって勇気を得られる場合もきっとあるはずですということで結んでおられます。本当に大事なことだと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

以上で質問を終わらせていただきます。

○議長　横尾　武志君

以上で、益田議員の一般質問は終わりました。